Collège de France

Philologie de la civilisation japonaise

2018-2019

Le Roman du Genji:
Poésie, langue et bouddhisme

9. Le 5 mars 2019

- *Le Genji au couvent* -

- 人悪ろく、つれづれに思さるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり。

- 「故母御息所の御兄の律師の籠もりたまへる坊にて、法文など読み、行なひせむ」と思して、二、三日おはするに、あはれなること多かり。

- 紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、故里も忘れぬべく思さる。法師ばらの、才ある限り召し出でて、論議せさせて聞こしめさせたまふ。

- 「このかたのいとなみは、この世もつれづれならず、後の世はた、頼もしげなり。さも、あぢきなき身をもて悩むかな」

- 「念仏衆生摂取不捨」

- いとうらやましければ、「なぞや」と思しなるに、まづ、姫君の心にかかりて思ひ出でられたまふぞ、いと悪ろき心なるや。

- 六十巻といふ書、読みたまひ、おぼつかなきところどころ解かせなどしておはしますを …

- 「山寺には、いみじき光行なひ出だしたてまつれり」と、「仏の御面目あり」と、あやしの法師ばらまでよろこびあへり。

- しめやかにて、世の中を思ほしつづくるに、帰らむこともものの憂かりぬべけれど、人一人の御こと思しやるがほだしなれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦経いかめしうせさせたまふ。

- ひさかたの　光のどけき　春の日に　静心なく　花の散るらむ 紀友則・84

- よろづの御物語、文の道のおぼつかなく思さるることどもなど、問はせたまひて、

- 塞ぎもて行くままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふところどころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。

- 初めの日は、先帝の御料。次の日は、母后の御ため。またの日は、院の御料。五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり。

- 即隨仙人，供給所須。採果、汲水、拾薪、設食，乃至以身而為床座。身心無惓，于時奉事。經於千歳。

- 今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、「薪こる」ほどよりうちはじめ、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。

- *Hokekyô wo / waga eshi koto ha / taki-gi kori / na tsumi mizu kumi / tsukaete zo eshi*

- 月のすむ　雲居をかけて　慕ふとも　この世の闇に　なほや惑はむ

- *tsuki no sumu / kumoi wo kakete / shitau tomo / kono yo no yami ni / nao ya mayowamu*

- おほかたの　憂きにつけては　厭へども
いつかこの世を　背き果つべき

- *ôkata no / uki ni tsukete ha / itoedomo / itsuka kono yo wo / somuki-hatsu beki*

- 人の親の　心は闇に　あらねども　子を思ふ道に　まどひぬる哉
- *hito no oya no / kokoro ha yami ni / aranedomo / ko wo omou michi ni / madoinuru kana*
- 藤原兼輔 Fujiwara no Kanesuke (877-933)
- 後撰集

- 親王たちも、さまざまの捧物ささげてめぐりたまふに、大将殿の御用意など、なほ似るものなし。常におなじことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをば、いかがはせむ。

- つねにすむ　わしの高ねの　月たにも　思ひしれとそ　雲かくれける

- *tsune ni sumu / washi no mi-yama no / tsuki dani mo / omoishire to zo / kumo-gakurekeru*

- 昔見し　花の色々　散かふは　けふの御法の　ためしなるらん

- *mukashi mishi / hana no iro-iro / chiri-kau ha / kyô no minori no / tameshi naruran*

- Fujiwara no Yukinari ; 972-1028行成